

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(4)〉

日常性から保育カリキュラムを考える(2)

いずみナーサリーにおける

保育カリキュラム

私市和子

保育課程の編成

保育所保育指針が改定されて、これまで「保育計画」としていた保育の全体計画が「保育課程」と改められました。このため、お茶の水女子大学(以下、お茶大)いずみナーサリー(以下、ナーサリー)では、保育所の役割を明確にして職員・幼保プロジェクトの先生方とも話し合いを重ねて、大学という地域性を活かした保育課程の編成を試みました。

ナーサリーの「利用日数選択型保育」形態の中では、

保護者(主に女性研究者・職員・学生)の研究生活の進め方や働き方に応じて月ごとに決められた曜日に子どもたちは登園しますので、日によって人数も顔ぶれも違ってきます。後期になると院生の保護者の希望が多く、○歳児が次々と入所して狭い室内で過ごすのは困難になるので、発達や育ちに応じて○歳から一歳へ、一歳から二歳へと数人がクラスを移行します。保育カリキュラムの中では年齢の枠はありますが、ゆるやかに重なり合う保育、柔軟な保育を行うことが必要になり、特に「少日数利用型保育」(週1〜2日登園)の子どもたちには、安定

した生活リズム・人・ものとのかわりが次の登園日に
つながるようについていねいに個別配慮しています。

また、保護者のニーズに応じた「一時預かり保育」では、子どもが安心できるものや場に出合えるようにと考
えています。ナーサリーの子どもたちは、不安になって泣く子を少し心配しながらもつられたりせず、また、自分より大きな子がくると大胆な遊びやテンポの良い会話を樂しみます。そこには、同じ場に集う共通の意味と共有するもののおもしろさ、いつもと違う人との出会いがあります。

附属幼稚園とのかかわり

お茶大附属幼稚園（以下、附属幼稚園）への入園は接続していません。しかし同じ場で遊びかわることも多く、大学の附属園として、いずみナーサリーと幼稚園保育（教育）課程の整合性・融合性を視野に入れる必要があると考え、附属幼稚園が考案した『幼稚園学びの概要』という枠組みを参考にして保育課程案を作成しました。

春、幼稚園に新しく入園した子どもたちが園庭のお山の上でナーサリーの建物に気づき、入り口をのぞく姿が見られます（P.61マップ参照）。室内からその姿を見るとヘンゼルとグレーテルがお菓子の家を見つけた場面と重なり楽しくなります。そこで私が玄関から「こんにちは」と出て行くと今度は魔法使いのお婆さんに出会ったように驚いて去っていくのです。その後、ナーサリーの子どもたちがお山で遊ぶようになるころ、ナーサリーという家の存在、小さな子どもたちの存在に気づきます。

春の「じゃがいもパーティー」では、幼稚園の子どもたちに不安そうに手を引かれお山を降り、お互いに緊張感がありました。日々のお山の出会いはその距離を近づけるようです。

ある日、幼稚園から二人の子が野菜を収穫、調理して「食べてください」と持って来てくれました。ちょうど散歩から帰ってきたKちゃんが着替えるところだったので、「着替えをお手伝いしてくれる？」と聞くと「いいよ、でも私、一人っ子だからやったことないの」と言い、



▲二人で協力して0歳児にズボンをはかせている

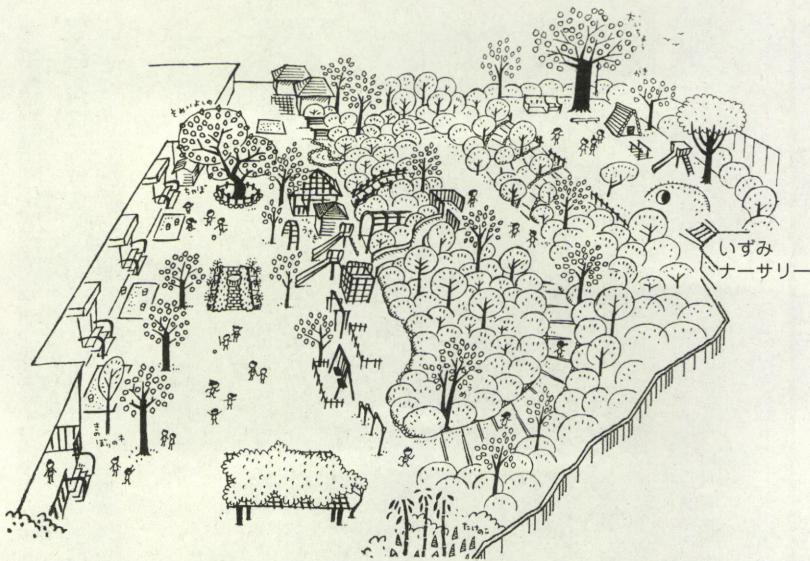
もう一人の子が「大丈夫だよ、僕が手伝うから二人でやろう」と小さな子を抱き上げ、協力してズボンをはかせてくれました。Kちゃんは、ちょっと窮屈そうでしたが泣かずに応じてくれました。そしてKちゃんの手を洗い、ほかの子どもたちも席に着くと大きな器に入った炒めたピーマンを一人ひとりの皿に分けます。ピーマンの量と並んでいる椅子を比べ、「このくらい入れても大丈夫」とその場にはない子の分も考えて分けているようでした。一歳児は、その姿をじっと見つめ、家では食べれないと思われる緑のピーマンを口に入れてもらい、パクパク食べていました。ナースリーの子どもたちに向けられた二人の思いを一歳児がしっかりと受けとめているようでした。幼稚園の二人は何かをやり遂げたような表情で帰ってききました。

秋の「しいのみパーティー」では、安心して幼稚園の子どもたちに身を委ねてお山を降りてくる子どもたちにも、「よさこいソーラン節」を踊ったり、しいのみの皮をむいたり、カエルを見せたりなどの歓迎をしてくれました。

ここでも、大切にされていることを心地よく感じている
一・二歳児がいます。その後、ナーサリーでは、ソーラ
ン節ごっこが始まり、どんぐりを拾うと皮をむこうとす
る姿が見られました。

幼稚園の子どもたちがお山を軽やかに登ったり降りた
りする姿を見て「登りたい」という思いになるのでしょ
う、ナーサリーの子どもたちはお山を見上げて挑戦を始
めます。あのように大きくなりたいとあこがれを抱く二
歳児です。保育カリキュラムのゆるやかなつながりの必
要性を、子どもたちが教えてくれているようです。

附属幼稚園の『幼稚園学びの概要』では、三歳児のス
テージに「出会い・安定」とあります。だとすると〇〇
二歳のナーサリーの子どもたちは、すべてが「出会い」
ではないでしょうか。母親と離れ保育士と信頼関係を築
きながら、学生・友達・ものと出会い、そこから少しず
つ自分の世界を自分の力で広げていく子どもたち。必要
なのは、その時に温かく見守ってくれる安心できる大人
の存在であり「出会いと安心」なのかもしれません。



▲お茶の水女子大学附属幼稚園 園庭マップ

学生とのかかわり

保育カリキュラムの中で学生は欠かせない存在です。インターンシップ、おやつ作り、保育ボランティアとさまざまな形で学生がナーサリーにかかわっています。

二十一年度は楽器演奏ボランティアを保育に巻き込みましたが、学生と子どもたちの両者が一体となった温かい時間が流れました。子どもたちにとってはフルート・クラリネット・トロンボーンなどの本物の音に触れる機会になり、学生にとっても授業では得られない学びがありました。

次の日、子どもたちは「ブープーのお姉さん来る？」と聞き、「ブープー」と歌うようにリズムをつけるので、色画用紙を丸めて細い棒を渡すと「ブープーのお姉さんごっこ」が始まりました。

保育士・学生・保護者、子どもにかかわるすべての大人が共に協力して育ちあう場になることが、いずみナーサリーの役割ではないかと考えます。



▲室内に面した人工芝で演奏する楽器ボランティア学生



▲演奏会の後に始まった「プープーのお姉さんごっこ」

幼保プロジェクトと共に研究を進めた三歳未満児の表現活動、対話的保育を日々の保育実践として積み重ねること、そして、月（クラス、個別）・週・日の記録から保育を振り返り省察を深め「利用日数選択型保育」における保育カリキュラムの検証をしていくことが、ナーサリーの保育の質を高めることになるのだと考えています。

（お茶の水女子大学いずみナーサリー）

注

1 参考までに、お茶の水女子大学いずみナーサリーの平成21年度保育課程の一部を掲載する。

いずみナーサリーの役割

- ◆ 乳児の発達の視点に立った質の高い保育をめざす。
- ◆ 女性研究者支援と教職員の福利厚生のある場である。
- ◆ 乳児の発達と保育に関する研究をおこなう。
- ◆ 学生の実習と多様な研究の場を提供する。

2

『幼稚園学びの概要』とは、お茶の水女子大学附属幼稚園の教育課程である。